



その記録と記憶

戦いと友好⑧

元治元年8月6日下関戦争の図
 (「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」(毛利家文庫63馬関戦争22)より)

九州から見た元治元年下関戦争の図

～「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」～

【元治元年下関戦争】

元治元年（1864）8月4日、英米仏蘭4ヶ国は、小倉藩領田の浦沖に艦船18隻を集結させます。前年（文久3年）下関で外国船襲撃事件を起こした長州藩（解説シート18参照）への武力行使のためです。それは事件への報復に止まらず、海峡封鎖を続ける攘夷勢力・長州藩に打撃を加え、力によって自由な通航を実現し、かつ幕府に横浜鎖港要求を撤回させるためのものでした（保谷徹『幕末日本と対外戦争の危機』）。

5日下関に向かった連合艦隊は、午後から大規模な砲撃を開始し、翌日には陸戦隊を上陸させ前田砲台などを占領し大砲を奪いました。戦闘は8日にはほぼ終結し、長州藩は休戦を申し入れます。連合艦隊は圧倒的な軍事力を長州藩に見せつけ、攘夷の無謀さを知らしめました。

【九州から眺めた下関戦争】

「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」（毛利家文庫63馬関

戦争22）には、この下関戦争を九州側（小倉方面）から観察し、その様子を描いた絵図10枚が綴られています。8月4～9日の様子を描いたもので、4～7日分各1枚、8日分4枚、9日分2枚です。

絵図には英米仏蘭軍艦の動き、軍艦から下ろされた端舟（カッター）が海岸へ向かう様子、陸戦隊の上陸ルートや戦闘状況、下関や彦島への砲撃とその被害の様子、9日海峡を制圧する4ヶ国の軍艦などが生々しく描かれています。

絵図中には「此山上ヨリ見取之図」などの注記があり、九州側から実際にこの戦争を観察していたことがわかります（白線内）。

【誰がこの図を描いたのか】

絵図が綴られた「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」には、下関戦争の状況を幕府に報告したさまざまな文書が書き写されていますが、その中に、8月4日～11日に現地を実際に見聞し、それを報告した人物が作成した文書があります。そこには小倉側から見た戦争の状況

◎なぜ「長州下ノ関ニ於テ仏英亜蘭戦争之始末書並絵図面共」が毛利家文庫に？

この文書は明治42年（1909）、平山成信（1854-1929、官僚、貴族院議員、宮中顧問官）が杉孫七郎に譲渡し、のち杉から毛利家へ寄贈されたものです。

平山の父省齋（1815-90）は幕臣で、慶応年間に外国奉行を務め、將軍慶喜側近として幕政改革や外国との交渉にあたった人物です（吉川弘文館『国史大辞典』）。

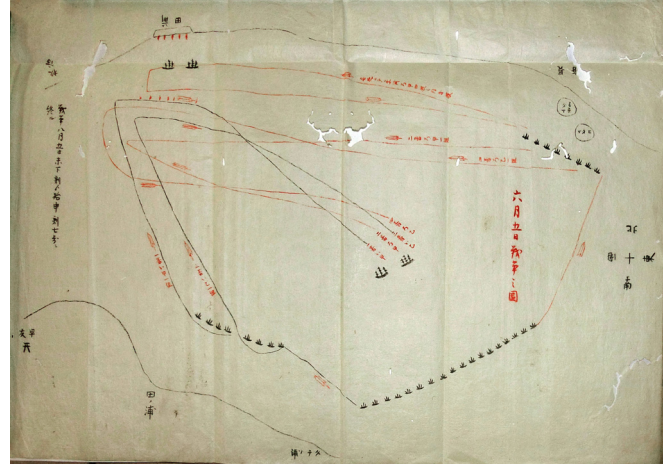
本来幕府に残る文書ですが、省齋が参考資料として手元に置いたまま明治となり、平山家に伝来したのでしょうか。明治末、平山成信が杉に「当家にこんなものが残っていますよ」と伝えたのではないのでしょうか。

や長州側の被害の様子を中心に、小倉藩や福岡藩の動向、さらには上陸した英軍人から直接聞いた話なども載せられています。注目されるのは、戦闘状況や艦隊の動きを説明するなかで、「図面の通り」「図面の如く」とする記載があることです。このことから10枚の絵図はこの報告書に添付されたことがわかります。報告書と絵図の作成者に関

する記載はありません。しかし報告書の内容から判断すると、幕府側から現地に派遣された人物が作成した可能性が高いものです。絵図は下関戦争を実際に観察した人物が、報告書と共にあまり時を置かず描いたものであり、それが連続して複数枚残されている点に大きな史的価値があると言えそうです。



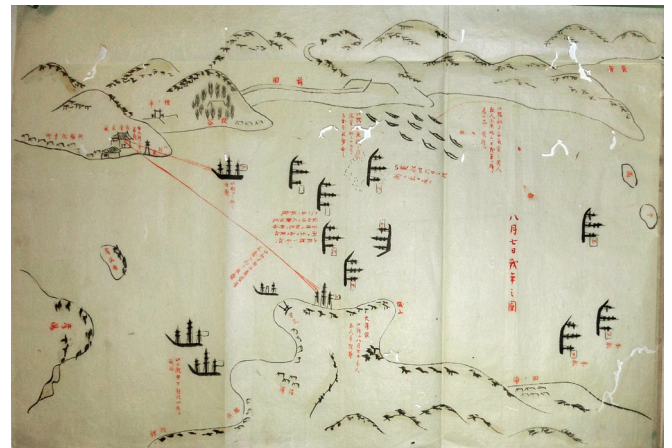
8月4日、小倉藩領田の浦沖に集結した連合艦隊18隻。



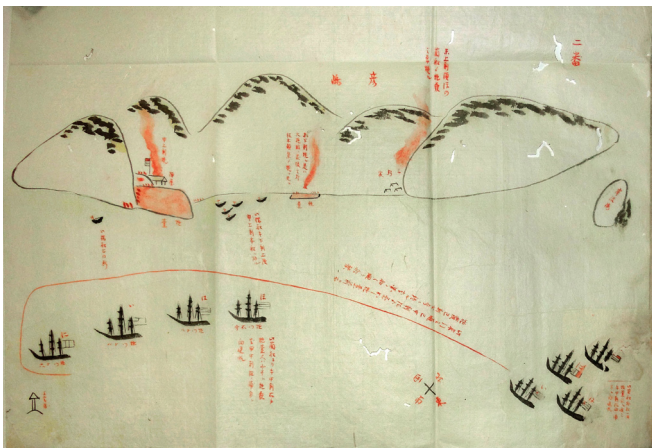
5日、2隊に分かれ前田砲台を砲撃する連合艦隊。艦船の動きが示されている。



6日、長州藩砲台を砲撃する艦隊。上陸を目指す陸戦隊の端船。左下に「此山ヨリ見取之図」との注記あり。



7日、砲撃する艦隊。上陸する陸戦隊。左上には長府藩の米蔵が砲撃されるようすが描かれる。



8日、砲撃される彦島。各艦には国旗も描かれ、どの国の艦船かが示されている。



9日、海峡を占拠する連合艦隊。連合国が戦死者を埋葬したことが左下部分に記されている。